

湯浅八郎と二十世紀（一）

武田 清子

1. まえがき

〔1〕湯浅八郎のグリンプス

湯浅八郎博士(1890-1981)は、二十世紀の暗い谷間にあつて苦痛と悲しみを身をもって体験した人であり、また、戦後、人類平和と諸民族の共生へ道をきりひらこうと希望をもって力をつくした人でもある。彼は初代学長として国際基督教大学の創設、基本的大学像とその理念の形成にかかわった人であるが、私は、この小稿において、国際基督教大学（以下、ICUと略称）との関係という一つの問題だけに焦点をしばって考察しようと考えているのではない。もう少し広く、湯浅八郎と二十世紀の諸問題とのかかわりを通して、二十世紀という時代は何であったか？ 二十世紀という時代が内包していた問題、その特質と意味をも問いたいと思うものである。

第一に、湯浅八郎は日本プロテスタントの初代クリスチャン・ホームに育てられた人である。一方、熊本バンドと関係の深い熊本県水俣の徳富家、他方、新島襄の故郷で、彼の最初の伝道地群馬県安中町に創設された安中教会の中心的存在となった湯浅家が背景をなしている。この二つの家族は近代日本における多彩な人物を多く生み出した家族である。そしてその結合から初代のクリスチャン・ホームが形成されたのである。

第二に、時代は飛ぶが、満州事変から第二次大戦へと展開していく人類社会、そして、近代日本の暗い谷間の時期に、同志社の総長となった湯浅八郎が、リベラルな思想の故に、超国家主義、日本的ファシズムの暴虐な圧力と攻撃を受け、神棚事件、勅語誤読事件等々が続発、大学内外の右翼、軍国主義者たちに

よって「国賊」よばわりをされ、総長の座を追われた受難の時代であった。

第三に、時期はさか上るのであるが、同志社普通科（中学校）卒業後、18才で少年移民として、単身で渡米、働きながら学び、京都帝国大学に生物学（昆虫学）の教授として招かれるまでの青年期16年間をすごしたアメリカ、同志社総長を辞任した後、インドのマドラスで開かれたエキュメニズムに重要な意味をもった世界宣教会議（マドラス会議と略称）のメッセージを報告するグループとして、アジアの友と共に招かれて渡米、各地で講演旅行をしたアメリカ、そして、そのまま第二次大戦が終結するまでの8年にわたる滞米生活、さらに、戦後、ICU創設・形成をめぐるのアメリカ諸教会の人々との交流・協力など、明暗を含む、生涯を通しての日米関係の体験、その独自のアメリカ観及び日米問題がある。

第四に、半分アメリカ人のような生活体験の故に、日本の「人々の心」を知りたいとのねがいが恐らくあったと思える。日本の庶民の生活に用いられた文化財ともいべき「民芸」への関心が高まり、京都の朝市（あさいち）に通うなどして、驚くほど沢山の民芸品を蒐集した。そして、日本文化の美の発見と民芸道への模索があった。

第五に、1952年から1961年までICUの学長を勤めたが、それは、アメリカを主力とする連合国軍の占領下であり、しかも、占領初期の時代は、全体主義的軍国主義からの解放の喜びもあり、日本国民にはある意味でアメリカ的民主主義への一辺倒的気風が強く、アメリカ帰りの学長は順風に帆をさす観がある一方、戦中・戦後から新しいキリスト教大学創設を準備していた人々との間に大学観・その理念に多少の相違もあった。そうした諸要因と共に異国臭の強い湯浅への反感・抵抗もあり、そういう現実は、一見、悠々としたのんきさを呈しつつも、孤独な苦闘の十年であったともいえる。学生たちには、生涯にわたって未来への指針となるメッセージを力強く伝えた学長であったが。

最後に、世界平和と人類共存への切なるねがいがあった。大学創設に当り、世界各国から教授や学生を集めたいとねがっていた国際基督教大学の入学に際

して、一人一人の学生に国際連合の「世界人権宣言」を守る誓いを宣誓させ、署名までさせることを湯浅学長が強く主張したことにも見られるように、人類社会のすべての人の人権が尊重されること、そのことの為に奉仕する人材の育成が使命と考えていた。

狭い専門に埋没せず、諸々の学問分野に開かれたリベラル・アーツの教育をICUの基本的理念とした。学問的には、「学際」(inter-disciplinary)を尊重した。また、他文化への理解、他民族との共存生活への実践(実験)を旨としたことはいうまでもない。彼は、大学学長の職を離れても、宗教的共存の大切さを「宗際」(inter-religious)と表現し、諸民族の共存を「民際」(inter-racial)というなど、一見、キザともとれる彼独特の新語を取って使って、諸文化・諸宗教・諸民族の共生する世界への念願を訴えて、諸々の人々の集会で講演をしつづけた人である。

自らの国籍がどこにあるかを余り気にしないと共に、他者の国籍なども余り気にならず、人類共存の夢を持ちつづけた人だったように思える。

ICUで「外人」という、ある冷たさ、を含む言葉を用いることをやめさせ、ジャパニーズ(日本人)とナン・ジャパニーズ(日本人でない人)という用語を定着させたのも彼である。

〔2〕二十世紀のグリンプス

次に、ここで、二十世紀とはどのような時代であったのか？そのグリンプスを概観しておきたいと思う。

第一に、二十世紀は帝国主義的支配と戦争の時代であった。第二次大戦時代には、ナチズム、ファシズム、超国家主義等による侵略戦争が推進されると共に、それぞれの国内において個人の自由が奪われ、専制的政治の行われる国が多かった。日本はまさにその典型の一つであった。

第二に、こうした戦争、イデオロギーの対立の故に、多数の難民が発生した。故郷を離れ、母国を失い、自己の文化的根を断たれて異国へとさまよい出る

人々が驚くほど多数生まれた。彼らは未知の世界へと生きる場（食・住・職業・自由など）を求めて国境を越え、海を渡って逃げ出さざるを得なかったのである。その中には、ナチズム、 Kommunismusなどの弾圧からの脱出もあり、アンティ・セミティズムによるアウシュヴィッツ収容所、ホロコーストなどの恐怖から生きのびた人々のイスラエル国家形成への悲願の旅があり、関東軍によって満州に置き去りにされた日本人のソ連軍の攻撃の中を母国へ逃げ帰った人々、あるいは、とり残されて戦争孤児となった人々の問題もあった。軍国主義的日本を脱出せざるをえない人々もあった。湯浅もある意味ではその一人であったともいえる。また、独立後のアフリカ諸国における人種差別、国内的種族間紛争の故の死と飢え、家族を失った孤児たちを含む「難民問題」である。

第三に、二十世紀は、ナショナリズムの勃興、すなわち、帝国主義的植民地支配からの民族独立運動（戦争を伴う）としてのナショナリズムの時代であった。アジアにおいては、ガンディ、ネルーらによるインドの独立、スカルノらによるインドネシアの独立、コリアの日本帝国主義からの独立、毛沢東、周恩来らによる中国革命等々が顕著である。アフリカにおいても驚くほど多数の新しい独立国が出現した。そして、国際連合総会においてそれぞれが一票を持つ時代となった。

しかし、それはその後、それら新独立国内における種族闘争 (tribal war) 等の新しい戦争が、さらなる難民、飢え、孤児などの問題などを生み、深刻化しているのが今日の現実である。

第四に、二十世紀は個々人の「人権」に関して普遍的な原理を明らかにし、人類社会にそれを承認させることを得た時代でもある。第二次世界大戦中の1941年にF. ルーズヴェルト米大統領が宣言した「四つの自由」(Four Freedoms)、即ち、「(1) 宗教の自由、(2) 言論の自由、(3) 恐怖からの自由、(4) 欠乏からの自由」を背景として、その趣旨実現のために確立した「世界人権宣言」が重要である（ルーズヴェルト大統領は1945年4月12日没）。1948年12月10日、「人権総会」とよばれた第三回国連総会が満場一致（棄権はあったが）で採択した「世

「世界人権宣言」(The Universal Declaration of Human Rights)は、人類史上、画期的な宣言であった。これは、ルーズヴェルト夫人が委員長となって、世界各国の憲法や人権に関する異なった思想を総合し、また、各国政府や諸機関の意思をとり入れながら非常な苦勞を重ねて作成したものである。この宣言は、人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治上の意思、出自や社会的地位などのいかににかかわらず、すべての人に平等の権利と自由を保障するものである。この「人権宣言」こそ、アメリカにおける黒人の市民権運動を正当化し、婦人解放、世界各地におけるエスニック・グループの独立宣言、南アフリカにおけるアパルトヘイト(人種差別)の否定、等々へと人権尊重が現実化してゆく人権思想の源泉となった。ベルリンの壁の崩壊(1989年11月)以来、ソ連邦に帝国主義的に包括されていた諸民族国家が、その独立へと展開していった大変動も、種々の政治的要因を内包するとはいえ、基本的には世界人権宣言にバックアップされているといえる。

第五に、二十世紀には、キリスト教会においては、エキュメニズム(Ecumenism 教会一致運動)が進展した。基督の体である教会が幾つもの教会や教派に分れていることへの深い反省から、諸教派が一つになることを目指した教会一致運動(エキュメニカル・ムーヴメント)がはじめたのは、1910年の第一回世界宣教会議(エディンバラ会議)である。この運動推進の中心人物は、オランダのヴィザトウフト博士(Dr. W. A. Visser't Hooft)やイギリスのカンタベリーのアーチ・ビショップ、ウィリアム・テンプル(William Temple)らであった。それが、世界のプロテスタント諸教会およびギリシャ正教を含むエキュメニズムの成果として、1948年のアムステルダム会議における世界教会協議会(World Council of Churches, WCC)の創設へと結実したのである。ロシア正教は1961年に加盟。(ローマ・カトリック教会との関係については、特に1962年-65年の第2ヴァティカン会議以来、カトリック教会は、開放的になり、対話はつづけられているが、まだ、一致に至っていない)。1938年に湯浅八郎が賀川豊彦、河井道、その他と共に出席したマドラス会議は、エキュメニズムのアジアにおける重要な一里塚

となった会議だったのである。

このエキュメニズムの運動は、キリスト教会内の問題にとどまらず、他の諸宗教やイデオロギーとの間の対話、グローバルな多元的文化・思想の間の相互理解への道をきりひらく契機をいろいろの面をつくってきた。

第六に、コンピューター、コミュニケーション技術の発達は、鉄のカーテン、竹のカーテンを越えて情報を世界のすみずみにまで即時に伝達するようになった。宇宙衛星からの情報解析は、軍事的目的をこえて、世界のすみずみの動き—公害、農作物、地下資源問題などをも含む—をとらえ、世界の人々にその情報を共有させると共に、砂漠の下にかつて存在した都市や湖までを推察させる力をも共有させるに至っている。

二十世紀は、こうした大きな人類社会の変革と未知数の未来への展望を問いとして投げかけてきたのである。

湯浅八郎の生きた九十余年は、必ずしもこうした二十世紀のすべての問題にかかわってきたわけではない。しかし、その中のある重要な幾つかの問題と具体的にかかわってきたのであり、その具体的かわりは、二十世紀の内包していた問題のある部分を、一個の人間の具体的体験を通して私共に伝え、また考える宿題を残して行ったものだったとも思えるのである。

2. 日本初代プロテスタントの家庭

—熊本の徳富初子と群馬の湯浅次郎—

湯浅八郎は二十世紀を通して、諸々の思想的、イデオロギー的受難を経験すると共に、日本を世界につなぐ上にも独自の働きをした人物である。彼の歩みを考える上に、先ず、彼を生み出した背景に、はじめにもふれたように、日本プロテスタント史において始めて誕生したクリスチャン・ホーム、キリスト教に立つ家庭があったことにふれておきたい。

ここで、矢島家と徳富家の生み出した人間群像を短くスケッチしておきたい。矢島家の娘たちは、まれにみる有能で“女傑”的な人物であった。

熊本教育者、茶堂・竹崎律次郎の妻となった三女矢島順子は、後に熊本女学校を通してこの地域の女子教育に重要な働きをした人物である。蘆花が尊敬し、心を尽くして賞賛して書いたその伝記『竹崎順子』⁽¹⁾にも強調されるすぐれた教育者であった。

六女津世子は横井小楠の妻として、小楠の女性関係を含めての複雑な小楠の家庭をよく治め、彼の青年教育活動を支えた賢夫人であった。

七女の楯子は不幸な結婚に自ら決別を断行し、日本基督教婦人矯風会を創設し、会長となり、また、櫻井女学校校長、後の女子学院の最初の院長となった矢島楯子である。

津世子や楯子の姉で矢島家の四女久子は徳富一敬と結婚、家系図に見られるように7人の子どもを生んでいるが、その四女の初子の弟は著名な評論家徳富猪一郎（蘇峰）、および、文学者健次郎（蘆花）であり、初子の姉音羽子（牧師大久保真次郎の妻）の娘が、矢島楯子の後継者として基督教婦人矯風会の指導者となった久布白落実である。久布白が市川房枝らと共に婦人参政権、公娼廃止などの運動を戦前から進め、戦後1956（昭和31）年の「売春防止法」成立への道をきりひらいてきたことは今さらいうまでもない。

このような矢島家、徳富家の人間群像の中で育った徳富初子が八郎の母である。初子は13才の時、小楠没後、時雄、みや子をつれて熊本に移り住んでいた小楠の未亡人で叔母である津世子のもとに預けられた。この時以来、いとこのみや子（後、海老名弾正の妻となる）とは生涯つづく親しい友となった。

好学心の強い初子とみや子は、はじめ、ジェインズ夫人の指導をうけたが、やがて男子生徒たちと共に熊本洋学校で学ぶこととなった。これは日本における最初の「男女共学」であった。しかし、女子が共に学ぶことに抗議する男子生徒達に、ジェインズは「君等の母上は女か男か」と問いかけ、男子生徒らの抗議は終わったが、初子とみや子の二人は最後まで部屋の外の廊下での聴講が

つづいたという。これが、当時の男女共学の実態であった。彼女らは花岡山での信仰宣誓には加わっていないが、二人は信仰に導かれていたのであり、初子はこの少女時代に魂の根底にキリスト教信仰をうちこまれ、さらに、後日、新島襄の指導を受けることとなる。

みや子も海老名弾正牧師夫人として、顕著な働きをすることとなったのである。後の東京女子大学長安井てつと共に『新世界』の編集にあたったのもその一つである。

熊本洋学校の創立に関しては、1871(明治4)年来日したキャプテン・ジェインズ(L.L.Janes 1838-1909)の指導のもとに熊本洋学校の教育が進められたこと、1876(明治9)年、花岡山における洋学校の学生有志のキリスト教信仰の宣誓により「熊本バンド」が誕生したことなどは周知のところである。初子は女性だから名をつらねていないが、彼女は明らかに「熊本バンド」の一人であった。そのキリスト教信仰への関心、積極的態度は、弟猪一郎(後の蘇峰)よりはるかに明確だったと思える。また、この熊本洋学校の創立の背景には、熊本の著名な実学者横井小楠がアメリカに関心をもち、特にワシントンを深く尊敬していたことから、亡兄の息子佐平太、太平を1866(慶応2)年に渡米させたことが契機となったことも広く知られるところである(病気のため太平が留学の途中帰国、新しい教育の必要を説き、細川藩主の決定で洋学校が設立された)。

横井小楠の「天の概念」については旧著^④にも書いたところであるが、彼の儒教解釈では天を理とするよりも、擬人的、あるいは、人格的な天帝として理解していたこと、井上毅との『沼山対話』の中で小楠が「耶蘇教は倫理を主として人に善を勧めることを主とするもの^⑤」といていること等から推察して、キリスト教に対して敬意をもっていたことが考えられる。こうした小楠の思想的影響を大きく受け、彼を深く尊敬していた熊本の実学派の人々が洋学校の創設を歓迎し、この学校に子弟を送り、やがて、熊本バンドの誕生となった経緯は容易に推察できるところである。

横井小楠が日米提携により世界の平和につくそうと考えていたこと、越前(福井藩)の藩主松平春嶽の知遇を受け、三、四度、熊本の沼山津から越前に往来して藩士の教育に当り、春嶽が幕府の総裁職についた時は、小楠もその賓客として幕府に進言の機会をもったこと、後日「広く会議を興し万機公論に決すべし」に始まる「五ヶ条の御誓文」の原文執筆者の一人といわれる由利公正などへの思想的影響が大きかったこと、しかし、その開明的思想の故に、1869(明治2)年1月5日、61才の折、京都で彼を「耶蘇教かぶれの売国奴」と見る刺客たちによって暗殺されたこと等は余りにも有名な史実であるから、ここではこれ以上深く立ち入らないこととする。

初子は、徳富家の大切な長男猪一郎(蘇峰)の東京遊学にも、京都同志社就学にも、姉として生活全般の世話係として同行を家族より求められた。東京では、彼女は叔母矢島楫子の家に同居していた。彼女は、猪一郎が福沢諭吉の慶応義塾に学んだ時には、女子部のない塾に初子も行って男子と共に学んだとのことである。また、アメリカのミシヨナリーよりフレーベル式の幼児教育法の指導を受け、幼稚園教師の資格をとっていた。

後に、猪一郎と共に京都に移ってからは、同志社の女学校課程の不充分さに満足ができず、初子は男子と一緒に学んだとのことであるが、こうしたことにも初子の好学心の強さと男子に負けない勝気さが見られる。猪一郎が熊本に帰って大江義塾を創めた時にも初子と一緒に帰って生活の世話をしている。身なりをかまわぬ人であったが、自然にそなわる容姿には一種の気品が備わっており、人目を引く印象的な女性だったとのことであり、求婚者も多い中、猪一郎は世話になった姉の良縁を常にねがっていたという。初子の縁談につき一つ興味深いエピソードが残っている。猪一郎のすすめにより犬養毅(後の政友会総裁、首相の時五・一五事件で1932年殺害さる)と見合いをしたことがある。その時、彼女は、開口一番、「あなたは一夫一婦の家庭観をどう考えますか?」と尋ねたという。犬養は驚き、そして、答えた。「一夫一婦ですか?私は今はまだ若い、将来、ひとかどの人間になったら女の一人や二人は相手にするでしょ

う。一夫一婦などということは、今から約束出来ない」と。「それではこのお話はこれ切りです」と初子は二の句をつがせず、直ぐにいとまを告げて帰ってきた。⁴⁾彼女が気に入っていた犬養をがっかりさせたということである。

初婚のこの初子が、病没した先妻の子が6人（内2人は夭折）もいる群馬県のキリスト者湯浅治郎の後妻として結婚したのである。母久子の姉や妹たちが後妻として結婚していることも、「後妻」ということにあまりためらいを持たせなかった面もあったかもしれないが、湯浅治郎という人物に共感を抱いた点が決定的だったのではないかと推察される。

次に群馬県の湯浅治郎の人と思想、その活動を概観したいと思う。

〔2〕 鹿嶋県群馬の湯浅治郎

八郎の父、湯浅治郎（1850—1932）は、群馬県安中町で味噌醤油を醸造販売する大きな商家（有田屋）の長男であった。そして、彼の妻茂登は、安中藩の御用達（御用商人）で地域に知られた儒者、詩人でもあった真下亀吉郎の娘であった。安中は、さきにもふれたが、同志社の創立者・新島襄の故郷であり、アメリカから1874年帰国した時、新島が最初に伝道をはじめた土地である。治郎は新島の影響のもとに1878（明治11）年3月30日、新島より洗礼を受けて入信した30人の信徒によって成立した安中教会の中心的存在であった。

新島は、「信者は酒を飲む可からず、男女混合の湯に入る可からず、安息日に旅行すべからず、常に聖書を携帯すべし⁵⁾」と申し渡したという。明治初期の日本プロテスタントはいずれの場合にも大体共通して見られたように、ピューリタンの倫理観がきびしかったのであるが、安中でも入信することは、この新しい倫理観をもって実生活を生きぬくことを意味したのである。

治郎は当時、県下に知られた儒学者で、しかも実業にも明るかったという真下亀吉郎の娘茂登と結婚していたが、6人の子供（内2人は夭折）を生んだあと茂登は病没した。湯浅家は治郎の母茂世がきりもりしていたが、彼女は家つきの娘で、息子治郎と共に、1878（明治11）年、新島より洗礼を受けている。

父（養子）治郎吉が放蕩者であったことが反面教師となり、治郎を禁欲的で真面目な人物たらしめたようである。新島のピューリタンのモラルの教えが彼を更に骨のあるプロテスタントにしたのであった。（父、次郎吉も安中教会のメンバーであったが、遊郭に行ったことにより、2度教会から除名されている）。

湯浅治郎の活動を概観すると、教会関係では先ず、養蚕所の建設が面白い。安中教会員30名の内、25名は旧士族であったが、廃藩置県により、彼らは生活の基盤を失っていた。禄高に応じて160戸余りの士族に分割された土地は零細で、家屋敷を含めて、家老級ですら二反（約20アール）余、多くは五畝（約1アール）内外で貧窮をきわめていた。こうした教会員の生活を助けるために、治郎は養蚕所を建設、田畑を持っていた彼は、桑を自ら寄附して、教会員が共同で養蚕に従事した。そして、各自の労働量のいかんを問わず、その収益は等分に分配した。人道主義的共産主義ともとれるその方法に、西洋の社会主義的考え方に通じるものと誤解されないかと心配した友人たちもいたとのことであるが、治郎はあくまでもキリスト者としての生活共同体の形成に関心をもっていた。新しい信仰に入ることによって、新しいエトスをもつこととなった人々による神の御栄えをあらわすための労働であり、共同事業だと考えていたのである。時は後のことになるが、治郎の告別式における小崎弘道（霊南坂教会牧師、一時、同志社総長）の「善且つ忠なる僕」と題する話の中に、「露国のボルシェヴィーキの事なども比較的深く御研究になっていて、どうしても日本の今日の経済状態はこのままではいけない。改革しなければいけないという意見を持っておられた⁶⁹」と語ったとのことであり、浮田和民もつづいてそう語ったと記録されている。

治郎は、また、日本最初の図書館の一つ「便覧舎」（他は、東京書籍館、および、京都の集書院）を安中に自費でつくった。蔵書は三千部、これを町の人々、青年たちに無料で閲覧させ、地域の人々の知識の啓発につくした。

治郎の自治体の民主化への働きにも注目すべきものがある。群馬県の県会議員を長くつとめたが、殊に財政通で、議会における予算案などが本当にわかる

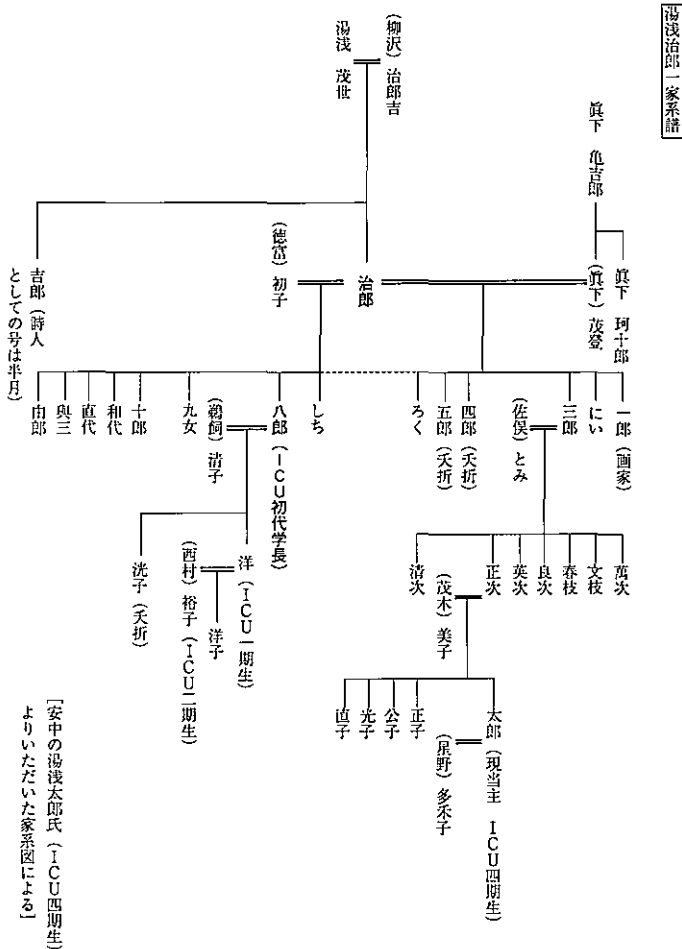
者は彼以外には少なかったといわれる。1881 (明治14) 年には県会議長に選ばれ、明治23年、第一回の国会議員に当選 (財務委員会第一分科委員長) するまで、10年間、県政の充実に努めた。彼の諸活動の内、顕著なものの一つは、廃娼問題である。1880 (明治13) 年、彼の妻茂登の兄で後に衆議院議員になった眞下珂十郎と湯浅治郎が主唱者となり、35名の県会議員連署の形で以て、廃娼に関する請願書を知事 (楯取素彦) に提出した。⁷⁾これは画期的なことであり、彼らは多くの反対運動、妨害などの障害と忍耐強くたたかい、1893 (明治26) 年12月31日、遂に県下の貸座敷 (売春宿) のすべての廃止を実現、群馬県は日本最初の廃娼県となったのである。これは、キリスト教に基づく新しいモラルの普及による青年層、婦人たちの運動が大きなきっかけとなったといわれる。このことは、日本における廃娼運動史に銘記される出来ごとであった。

こうした廃娼運動が群馬県の民間に普及・浸透していた一例として、1885 (明治18) 年にキリスト教に入信した松宮彌平 (ICU三期生松宮丞二氏の祖父) のケースは興味深い。彼は群馬の各地で伝道活動をし、宣教師に日本語を教えた最初の人ともいわれるが、彼が婿養子となって経営した鍋屋旅館はクリスチャン宿屋として一切酒を出さないことで知られていた。また、彌平は熱心に廃娼運動に取り組んだ青年の一人であって、後日 (大正7年11月1日)、「男女貞潔之理想、公娼廃止之主張」をスローガンとする雑誌『郭清』(The Purity) が彌平らの努力により、安部磯雄を理事長として発刊され、各界の代表的人物を理事、執筆陣に動員して、大正・昭和を通して広く読まれるに至った。彌平はこの会の理事として、群馬県の廃娼運動の実状につき執筆しているが、ある号には、徴兵検査における花柳病 (性病) 保持者が他府県に比べて群馬県では非常に少ないことなどをデータをあげて調査報告している。

また、湯浅治郎は、県会議長として県政の民主化につとめた。その顕著な働きの一つは、県知事ら地方官を中央政府が中央の意向で地方の実情もわからない者を勝手に選び、地方に送りこんで来る状況に抗して、地方自治制の民主化要求として、地方官民選の権利を確保しようと試みたことである。県知事や書

記官らを県民による公選にするかわりに、その俸給はすべて地方税でまかなってよいとする建議を、治郎ら六議員名で中央政府に対して提出している。県政自治のため、地方官民選の権利を、県民の経済的負担をもってでも、獲得しようとする試みは、当時、日本の他府県ではみられない試みであった⁽⁸⁾ (これは実現しなかった)。

次に治郎の家庭観に入る前に、湯浅家の略系図を紹介しておくこととする。



〔3〕 治郎と初子の家庭形成の方法

お見合いの席で「一夫一婦論」についての考え方の違いの故に、気品のある美しい徳富初子から即座に縁談を断われ、若き日の犬養毅に失恋の思いをさせたという初子（当時26才）が、6人も先妻の子（2人は夭折）を持った湯浅治郎（当時36才）と結婚する道を選んだ。これは、意外な思いもするが、上述のように、治郎は新島襄の指導のもとに入信したキリスト者であり、その人柄と思想、地域社会における諸活動などを考える時、十分に納得がゆくように思える。

治郎と初子の新生活の始め方は興味深い。安中教会の確氷会堂に於て、1895（明治18）年10月9日、結婚式が行われ、親睦会后、二人は前橋の鍋屋旅館（松宮彌平経営）に二、三日宿泊している。その後、子どもたちにも逢っているが、同14日からの伊香保への新婚旅行に、旧友で今は牧師婦人の海老名みや子を同伴していることは面白い。二週間余のこの日々に、山に遊び、湯に浸るだけでなく、その後の彼らの生活設計が十分に話しあわれたらしい。独自の決定は、湯浅の賢明にして有能な母茂世が采配をふるい、地域の婦人会をも組織する安中の湯浅家に嫁として入るのではなく、初子にとってなじみの深い東京の赤坂に住まいを確保することとなった。そして、二人で東京の新生活を始めた上で、その家庭へ先妻の子を順次迎えている。先ず、長女のにい（12才）が治郎に伴われて来ており、初子の叔母矢島楫子が校長をする櫻井女学校（後の女子学院）に入学している。その次には9才の次男、三郎少年が到着、さっそく小学校に入学、次に16ヶ月になったばかりのろくが乳母につれられて来ている。長男一郎は同志社中学に学んでおり、洋画家になりたく、美術学校への入学を志望していた。安中教会の牧師海老名弾正夫妻は東京に来る度にこの家を常宿として泊っていたという。

先妻の子どもたちを含めた新妻初子との新しい家庭形成の方法は、後妻となる妻の主婦としての主権を尊重した配慮をもって、二人の新しい家庭をつくるために慎重かつ合理的に計画されて進められており、なかなか興味深い。14人

の子どもを男女ともに、1（一郎）から14（由郎）までナンバーをもって命名している合理主義者、治郎らしい発想と実践性が顕著である。⁹⁾ 治郎と共につくる新しい家庭に先妻の子4人を迎えてその母となる道を学びつつ初子は彼らを育て、さらに、自らの子どもしち、八郎から14人目の由郎にいたる8人の子供を産み育ててゆく母となるのである。

それと共に、初子は、東京における自らの里ともいうべき叔母の矢島楯子の女子学院（櫻井女学校と築地の新栄女学校と合併）によくゆき、この学校で教え、また1886（明治19）年の日本基督教婦人矯風会の創設にあたっても楯子のよき協力者であった。治郎の群馬県における廃娼運動は、矢島楯子、初子らの思想的影響も大きかったことがしのばれる。楯子は群馬県に幾度か講演に訪れている。

他方、治郎は、その間、決して東京の家に定住していたのではなく、子どもたちの育成と教育を初子にまかせつつ、東京と群馬県安中との間をゆききし、湯浅家の家業の責任を担う母をよく助けて経営者としての役割を果たすと共に、上述のような、県会議員、県会議長としての活発な活動を続けていたのである。

家族間における合理的関係の形成の一つのよい实例は、治郎創案の財産相続法にみられる。彼には、上述のように14人の子供があったが、長子一郎は洋画家であり、商家を継ぐには適さない。初子に育てられた彼の子供たちのうち、次男三郎がその資質を最もよく持っていると見きわめた治郎は、三郎を家業の世継ぎと決めた。彼は、14人の子供たちに財産を等分に分けるのではなく、三郎に全財産を相続させたが、その方法は、15カ年の年賦償還で財産を買いとらせるという方法であった。つまり相続者は資産全部を預ってこれを自由に運用し、その収入をもって、年々弁済することとし、横浜にまで出かけて公証登記までしている。その取立てはようしゃなく、冷酷に思えたことも度々あったという。しかし、三郎と妻とみはよく頑張つて、11カ年で義務を果たし終えたのである。このようにして、親の財産を自分だけが独占的に継ぐという、うしろめたさや負い目を他の兄弟、姉妹に感じる必要なく、自らの労働をもって買

いとったものとして有田屋の全財産を三郎・とみ夫妻は自己のものとする事が出来たのである。晩年、安中にお訪ねした時、とみ夫人は、筆者に、「大変苦しい時もありましたが、結果的には非常にさわやかで良かったとつくづく思います」と語っておられた。

他方、治郎は、こうして有田屋の資本より合理的に得た収入によって、あと13人をそれぞれにふさわしく育て、独立の道をきりひらかせる一方、その資金の一部をキリスト教関係の図書出版のために警醒社⁽¹⁰⁾という出版社の創立(1883<明治16>年)にあてている。全国に株主をひろくつっているが、主たる出資者は湯浅治郎であった。この書店より名著、植村正久の『眞理一斑』(1884<明治17>年)、小崎弘道の『正教新論』(1886<明治19>年)などが出版され、当時の青年や知識層に大きなインパクトを与えることとなったことは注目すべきことである。初子の弟、徳富蘇峰が明治20年代、「平民主義」(デモクラシー)の思想普及のために民友社を設立し、『国民之友』(1887<明治20>年)を創刊したのも湯浅治郎の資金援助によるものであり、発売事務所は湯浅の赤坂の家の玄関三畳間だったのである(蘇峰が皇国的国家主義に転向したのは日清戦争後である)。

治郎は新島襄が1890(明治23)年急逝した後、同志社の財政を憂えてであろうか、国会議員(その財政通の故に後は大蔵大臣の可能性を考えていた人たちもいた由であるが)を辞し、1891年家族と共に京都に居を移し、自らは極度に質素な生活をしながら、財務理事のような形で20数年間無給で同志社の経営にあたった。同志社からもらったものは、辞める時に贈られた銀時計のみであったとのことである(八郎談)。

従って、湯浅八郎は1891年より京都に移り、京都府立師範附属小学校に転校し、卒業後は同志社普通学校に学んだ。しかし、家庭の生活は質素で、東京の浅草とか京都の京極とかいった盛り場にゆくというようなことは全然なかったという。その間、当時、余程の金持の子しか持っていなかった友人の自転車に興味をもち、友人の許可をえて授業時間にそれを借りうけて自転車乗りに夢中

になったことなどにより、自転車は上手になったが、算術が17点となり、落第となった。しかし、翌年には成績を取り戻しクラスで主席となり、卒業式では答辞を読んだという。

湯浅家では、父治郎は寡黙であったが、初子は子どもたちにきびしい母であった。先妻の娘ろくも自分の生んだ娘しちも、二人が同様に「お母さんは恐かった」と語っていたという。湯浅八郎が幾度か筆者に語った少年時代の経験にも、それは顕著にみられる。ある日、下校途中、人力車夫が「坊ちゃん、お乗りなさい」というのを何度もことわった。それでも乗れというので乗ったことがある。すると、月末にその請求書が来た。母は「人力車に乗ったのか?」と叱問した。八郎は恥かしかつたので「乗ってない」と答えた。すると、そういう嘘をつくことは許せないと母初子は八郎を縁側から庭に蹴落し、涙ながらに丸太棒でしたたか叩きのめしたという。このことは生涯忘れられない体験であって、八郎の人間形成に決定的な意味をもったと思うと彼自身語っていた。自分の生んだ最初の男の子である八郎への必死の対決だったのである。このように母初子は子どもたちすべてにとって恐れ存在だったようである。

それと共に、子どもの多い彼らの家庭は幼稚園のようであったが、聖書を読み、食前の感謝をすることも欠かさなかった。日曜日の教会、日曜学校の出席は当然、そして、月に一回は皆集まって歌をうたったり自分の作文を読んだり、自分らの画を展示したり、ドラマのようなことをしたりなど、学芸会のようなことをして楽しんだとのことである。夏には逗子に家族みんなが滞在して海水浴を楽しむということも年中行事であった。

ここには儒教的スパルタ教育とキリスト教的人間形成の教育との織りまざった家庭生活がみられる。

湯浅八郎は、16才の時、同志社教会で洗礼を受けている。「神と人との前に正しい人間でありたい」とねがったとふりかえっている。そして彼は、アメリカにゆく決心をした。これは留学というのではなく、少年移民ともいうべき、あてもない渡米であった。父、治郎にその希望を伝えると、アメリカに行ったら

自分のことは自分で責任をもってやってゆく決心があるかときかれ、「あります」というと、それなら行ってよいと許可が出た。父治郎は三百円で一等の船賃を払ってやって送り出したというが、あとは自分で責任をとって生きてゆけという教育方針だった。

1908（明治41）年夏、アメリカに出発する前、八郎は母の弟で叔父である徳富蘆花のところへお別れのあいさつに行った。八郎少年は叔父の蘆花夫妻とは親しくしていたようであるが、蘆花は半生の「懺悔録」ともいべき小説『富士』の中で「太閤（秀吉）の幼な子みみたいな顔をしたひょうきんな」甥と書いているので、秀吉のように猿のような顔をした甥と考えたのだろうと八郎は述べている。

アメリカに単身で出かける甥の八郎に蘆花は自分が日頃使っていた鞆、今でいえばブリーフ・ケースをはなむけにくれた。そして、そのブリーフ・ケースの中には次の聖句が書かれていたという。

「しかし主を待ち望む者は新たな力を得、
わしのように翼をはって、のぼることができる。
走っても疲れることなく、
歩いても弱ることはない」（イザヤ書第40章31節）

湯浅八郎少年は上述のように何ら具体的目標や計画もお金も持たずに、ただ、キリスト教国アメリカへと独りで旅立って行ったのである。

〔4〕 家庭が八郎に植えつけた人生への指針と信条

以上のような家庭的背景から湯浅八郎が植えつけられた人生への指針、生きる信条と思えるものを、ここでもう一度、概括しておきたいと思う。

第一に、新島襄がもち来させたピューリタンの信仰とそれに基づく厳格な生活倫理観（エートス、モラル）が考えられる。「湯浅八郎は本当にキリスト教信

者だったのだろうか?」という発言を二、三の人からきいた記憶がある。彼はあまり、神学的表現で語らなかつたことによるかもしれない。しかし、父、湯浅治郎も、母、徳富初子も新島襄から直接指導を受けており、伝統的思想やモラルにとって衝撃的なインパクトを受けてキリスト教信仰に回心した事実があり、その新しい信仰と生活原理に共鳴して結婚した二人である。その家庭できびしく育てられた八郎は、同志社普通科に学ぶ間、同志社教会に出席し、1908年4月17日、16才で同志社教会で洗礼を受けたキリスト教信者であり、それを生涯堅持していたと私は思う。

第二に、父治郎は家庭では寡黙で余り子どもの育て方に口を出さなかつたようであるが、母初子は上述のようにきびしい母であった。横井小楠の弟子であった一敬を父にもち、また、叔母津世子が結婚した横井小楠没後の家に預けられていたことから推測して、儒教の実学思想の影響をもととは受けていたと思われるが、その土壤にピューリタニズムの信仰ときびしい倫理観を積極的に受け入れたことが初子を非常に強靱な精神をもつ女性に育てた。それは、上述のように嘘をついた息子を縁側から庭に蹴り落とし、涙ながらに丸太棒でたたかに叩きのめす強い母にしたのであった。これは、八郎にその生涯を貫いてゆめるがない精神的根性とも骨ともなるものを植えつけたと考えられる。それがキリスト教国アメリカへ少年としてのある夢をもち、何の具体的計画もなく、未知の未来を求めて一人で旅立つ決意をさせる強靱なものかを彼の中に用意したように思える。両親も18才の少年を、あの当時、独りで異国へ送り出す勇氣を持っていたのである。

第三に、彼の家族観であるが、祖母久子の矢鳥家も、母初子の徳富家も多彩で個性的な姉妹兄弟を容れており、その生活共同体ともいうべきつながり方、交渉、交流は、遠慮がなく、自由で親密であった。横井家に子どもを長期間預けたり、叔母矢鳥楯子の家を東京で泊る場所としてためらわなかつたことなども一例である。

八郎の育った家庭には母を異にする子どもが14人（2人は夭折）もあり、一

家が幼稚園のようであったといわれるような生活共同体であった。こうした多種多様な家族、親族の親しいつながりは、伝統的な閉じた家庭に比べると、驚くほどに開かれた家族関係である。異質のものを異質として排除しないで共存し、助けあう共同体としての家族観が八郎の育った生活基盤であった。それが、後に、「ICUファミリー」を唱えさせ、他民族と共に生きる人類社会への夢の「芽」ともなるものを用意させたのではないかと考えさせられる。

第四に、八郎の女性観についてであるが、母初子をはじめ、伯母竹崎順子、叔母横井津世子（小楠の妻）、同じく叔母の矢島楯子、いとこの海老名みや子（弾正夫人）、久布白落実など、日本女性の教育、公娼廃止を含む廃娼論、一夫一婦の家庭の形成、婦人参政権獲得運動などに、開拓的な働きをする傑出した、すぐれた女性たちを身近に持ち、彼女らの活動と接しながら育った人である。従って、湯浅八郎にとって戦後のフェミニズム運動などは今さら問題でなく、男女平等の考え方は当然すぎることであったといえる。国際基督教大学に開学時から男女差別観が不在であったことは全く自然のことだったと思われる。

第五に、これは第二の問題ともつながるのであるが、湯浅八郎は、神様と共にあるということで、「独り」であることを気にしないで生きるタフさが身についていた。彼は日本人には珍しくユーモアのある人であった。ユーモアは、自己もふくめてすべてのものを対象化して自分からつき放した時に生まれてくるものように私には思える。ある来客が自分が大切にしている二千年ほど前のメソポタミアかどこかの古い石でつくったペンダントを多少誇らしげに湯浅八郎に見せて話していた時、湯浅は5センチ四方ほどの黒い石ころを棚から取り出して来て、「今、あなたの手の中にある石は一億年前にこの地上に住んでいた恐竜の胃袋の中にあった石なんですよ」と言ったので、一座は大笑いになった。「時」の常識的スケールをこえた見方がそこにあった。晩年、耳がきこえなくなられ、理事会に出席のため、一人で京都から東京へ新幹線で来られるのは危険だ、私から理事長をもうおやめになった方がいいのではないかとってほしいと関係者からいわれたことがある。湯浅理事長にそれをお伝えしたところ、「清

子さん、神様はつまらないことは耳に入れなくてもよいと考えて下さっているのだよ」といわれ、平然として京都と東京の間を一人で往復された。耳のきこえないことを少しも恐れない人であった。そして、御自宅で美しい最後を迎えられた。

「私が最善と思ってやってきたことにも間違いは多くあったかもしれない。しかし、私は、自分としては最善をつくす。しかし、お裁きは神様におまかせする」とよく言われた。このことが深く印象に残っている。この世のこと、人々がいろいろいっていることを余り気にせず、「神様と私」という関係の中で一見単純ともいえる一すじの道を歩みつづけ、「お裁きは神の御手に」という「精神的、信仰的オプティミズム」ともいうべきものが、湯浅八郎の人生をささえてきた「さわやかさ」だったのではないかと私には思える。

第六に、これは、八郎がアメリカにて勉学中のことであるが、1914（大正3）年、組合教会の指導者たちが、植民地化した朝鮮人教化のために、朝鮮総督府の機密費より匿名寄附をもらい、朝鮮伝道を計画したことがある。これに対して、湯浅治郎は、東大教授で大正デモクラシーの指導者、吉野作造、安中教会牧師、柏木義円と共に強硬に反対した。この3人は、朝鮮人の独立への志を重視することこそ大切であるのに、朝鮮伝道によって彼らの反抗心を取り去り、独立自治を求める心を転じて日本国民化させようとすることは断じてしてはならぬと主張した。こうした治郎の他民族を思う志は、湯浅家の思想として、八郎に影響するものがあつたと考えられる。

（以下次号につづく）

注

- (1) 徳富健次郎『竹崎順子』。
- (2) 武田清子「横井小楠における天の概念」、「日本の精神的伝統と小崎弘道(1)」、拙著『人間観の相剋』、68-72頁収録。
- (3) 山崎正董『横井小楠』、900頁。上記小著にも引用している。
- (4) 久布白落実『湯浅初子』、11頁。「これはブラジルへの飛行機の中で久布白が書いたものであるから史実に不明確さがあるかもしれない」とのこと（湯浅八郎談）。

- (5) 湯浅吉郎編『湯浅治郎』、10頁。吉郎は治郎の弟で詩人の半月である。
- (6) 同上、76頁。
- (7) 真下龟吉郎の息子、珂十郎は自家に雇用する青年らが、近くにある遊郭に出入し、浪費すると共に、病気を受けて帰ってくるなどの問題に頭をなやませていた。そこで湯浅治郎らの靡娼論に強い共鳴を感じ、主唱者になった。このことは、久布白落実も『湯浅初子』（95頁）の中に書いている。
- (8) 『群馬県議会史』第一巻参照。なお、拙論「湯浅治郎—群馬県におけるコミュニティの質的変革—」に詳述した。これは『人間観の相剋』に収録。
- (9) 男女を問わず、14人の子どもを次のようなナンバーで命名している。一郎、にい、三郎、四郎、五郎、ろく、しち、八郎、九女、十郎、和代、直代、與三、由郎。
- (10) 警醒社は、1883（明治16）年、湯浅治郎、小崎弘道、植村正久、浮田和民が発起人となり、全国に株主をつのり、東京の京橋区紺屋町に設立している。

参考文献

- 久布白落実『湯浅初子』東京市民教会出版部、1937年。
- 群馬県議会事務局『群馬県議会史』第一巻 群馬県議会、1951年。
- 武田清子「日本の精神的伝統と小崎弘道(1)」『福音と世界』1957年11月号 新教出版社、1957年、64-71頁。
- 武田清子「湯浅治郎—群馬県におけるコミュニティの質的変革—」『福音と世界』1958年11月号 新教出版社、1958年、48-53頁。
- 武田清子『人間観の相剋』弘文堂、1959年。
- 同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想』日本YMCA同盟出版部、1977年。
- 徳富健次郎『竹崎順子』福永書院、1923年。
- 『徳富蘇峰集』明治文学全集34、筑摩書房、1974年。
- 山崎正董『横井小楠』下巻 日新書院、1942年。
- 湯浅吉郎編『湯浅治郎』湯浅三郎（出版者）、1932年。
- 湯浅八郎『若者に幻を』国際基督教大学同窓会、1981年。

補遺

なお、筆者に伝記の執筆を望んでおられた湯浅八郎先生が筆者の問いに答えて幾度かにわたって語られた自己の歩みについてのお話のテープおこしの原稿、「同志社事件」の諸資料、その他が筆者の手もとにある。

Yuasa Hachiro and the 20th Century (1)

<Summary>

Takeda Kiyoko*

Dr. Yuasa Hachiro (1890-1981) was the first President of International Christian University (ICU). He devoted his energy to the foundation of ICU and to the formation of the basic concept and ideals of the university. However, in this article, it is the author's wish to treat Yuasa not only within the ICU context but to place him in a wider context by tracing his encounter with the problems of the 20th century in order to consider what the 20th century was.

In the first of this series of articles on Dr. Yuasa, the nature of the family life of the first generation of Protestants in Japan in which Hachiro was raised is taken up. The Kumamoto-Yōgakkō (the Kumamoto School for Western Studies) was founded in 1871 (Meiji 4). Some of its students were genealogically related to Yuasa's mother's side, and the Annaka Church in Gumma, where his father became a Christian, was founded in 1878 (Meiji 11). So, from a chronological point of view, the author begins with the Yajima and Tokutomi family in Kumamoto. Tokutomi Hatsuko, Hachiro's mother, was the daughter of Yajima Hisako and Tokutomi Ikkei (Kazutaka), the first disciple of Yokoi Shonan, a Confucian, Jitsugaku (practical school) scholar at the end of the Edo-period. The establishment of the Kumamoto-Yōgakkō can be traced to a proposal by Yokoi's nephew who studied in the USA. Under the influence of L. L. Janes, a Protestant teacher in the Kumamoto-Yōgakkō, a group of students converted and became one of the first groups of Protestants in Japan, and were called the Kumamoto Band. Hatsuko also attended this school. This was the first instance of co-education in Japan.

Next, the author turns to Hachiro's father, Yuasa Jiro. Niishima Joe, founder of Doshisha University, began his evangelical activity in his hometown, Annaka, after his return to Japan from the USA, and Annaka Church was founded by 30 people in 1878. Yuasa Jiro was the central figure of this Church. He was the eldest son of a large merchant family in Annaka engaged in the production and sale of *miso* (soybean paste)

and *shoyu* (soy source). He dedicated his energy to fostering a Christian community by, for example, establishing a common sericultural facility for those in need. As Chairman of the Gumma Prefectural Parliament, he was also committed to the establishment of local autonomy for prefectural governments free from the control of the central government. In addition, he played a pivotal role in the abolishment of licensed prostitution in Gumma Prefecture, a first in Japan. He was also elected to the Diet in its first election in 1890.

Many sought to marry Hatsuko. But she chose Yuasa Jiro for her husband even though he was a widower whose first wife had died after an illness leaving him with several children from that marriage.

The start of their married life is interesting. Hatsuko did not move into the house in Annaka as a daughter-in-law where Moyo, the competent mother-in-law, was managing. Instead, the couple started their new life in Akasaka, Tokyo, and invited motherless children, one after another, to live with them, and Hatsuko herself bore eight children. Jiro was going to and fro between Tokyo and Annaka, taking on his responsibility of the family business in Annaka and at the same time devoting his energy to the prefectural government. Hatsuko is said to have been stern with all the children. Her strict attitude toward the children was due to a combination of Puritan ethics and of a spartan education based on Confucianism. It is said that one time when Hachiro lied Hatsuko kicked him off the veranda of the house onto the ground and hit him with a stick. Hachiro was the first boy to whom Hatsuko gave birth. This kind of parental discipline became his mental backbone throughout his life. Hachiro was baptized at the age of 16 (at Doshisha Church). He wished "to be a righteous man before God and before people." At the age of 18, he went to the United States, alone, as a young immigrant.

The next in this series of articles will further address Hachiro's life and work. This will include his years at the University of Illinois working on his Ph. D., his scholarly works as a professor at Kyoto Imperial University and the "Doshisha Incident," in which he was forced to resign as the liberal president of Doshisha University when he was accused of being a traitor to his nation by the pressure of ultra-nationalists and militarists. This kind of right wing ideological pressure was common in Japan until 1945.

*Although this journal usually lists family names last in articles written in English, in this case, at the author's request, we have followed Japanese name order.